



Title	鏡台から化粧台へ : 昭和40年前後の家具加工
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100288
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

鏡台から化粧台へ

昭和40年前後の家具加工

谷本 尚子 京都精華大学

はじめに

本研究の目的は、伝統工芸から始まった阿波鏡台が、高度成長期に表面加飾の開発を通して、時代に則った製品開発を行ってきた軌跡とその技術開発との関連を明らかにすることにある。なお本研究は徳島市の阿波鏡台歴史館での調査に基づいている¹⁾。

阿波鏡台とは

徳島県では、伝統産業である藍染、しじら織と並んで木工業が盛んである。その始まりは、天正13年阿波初段藩主蜂須賀家正による安宅地域での御舟役場の設置であり、船大工が内職として指物などの製造が起源である。明治時代になって船大工や細工人の技術を活かした安宅物アタクモノと呼ばれる仏壇や鏡台が地場産業として興隆した。昭和初期には西洋風鏡台の制作が始まり、昭和30年代から50年代頃には業者数が飛躍的に増加し、徳島と静岡が鏡台の二大産地と言われるようになった。

阿波鏡台の変遷

江戸時代に手鏡を置く箱として作り始められた鏡台は、明治時代までは比較的小型であったが、大正期には大型化し、分業化も進む。1) 台を作る業者、2) 鏡のタテやワクを作る業者、3) 塗装業社、4) 仕上げ加工と卸販売の四つの業者に分かれた。生産数が激減した現在では、仕上げ加工と卸売を行う製造問屋が、木地、或いは塗装のいずれかと組立部門を持っている。

素材と加工の変遷

阿波鏡台の特徴は、引き出しなどの内部は殆ど桐を使って白木とし、切り込みを入れて組み合わせた箱を基本としている点にある。大正期の新技術としては、人工杢理、ツキ板など合板利用の製法が導入され、これに富喜塗りと呼ばれる茶黄色の漆仕上げを施し、高級品に次ぐものとして販売された。これらの技術は主に静岡で開発されたものだが、すぐに徳島でも導入された。

戦前までの鏡台の塗装は黒が一般的であり、上等品には螺鈿細工を施すというのが通例であった。明治期には漆の代替品としてのニス塗りが導入された。ニス仕上げは安価版であり、大正末期にラッカー塗装が開発されると、漆塗りやニス塗りに取って代わった。

材の種類も表面加飾に影響を与える。終戦直後は松材や桧が使われ、これらの材料は黒く塗るのが無難だった。しかし昭和23年桂材が北海道から大量に移入されると、漆の金茶（ブロンズ）塗りといった明るい塗装が全国的に流行する。

ポリエステル塗装は昭和31年以降導入される。小規模製造所が多い徳島では、導入当初はスプレーガンで塗装する方法はコストが合わず、刷毛で塗れる粘度の樹脂を開発する必要があった。指物としての鏡台は、漆塗り、蒔絵などの製品を高級とする歴史があり、ポリエステル塗装は光沢のある艶やかな仕上がり好まれ積極的に取り入れられたと考えられる。

日本独自の鏡台ードレッサー

昭和 30 年代の前半には生活様式の洋風化が進み、洋間にふさわしい鏡台の開発が始まる。鏡台に足がつき椅子を用いる、3 面の洋鏡を備えた鏡台が一気に普及した。鏡と筆筒が融合した日本独自の鏡台を、(有) 清水商店(徳島市城東町)はドレッサーと名付けた。

ドレッサーは、化粧、着付け、姿見の三つの機能が求められ、豪華な嫁入り道具としてセット販売されるようになる。他方昭和 41 年の物品税の改正に伴い、ドレッサーは筆筒として課税対象とされた。その理由は「ドレッサーと称する物品は、タンスの上に鏡を取り付けたものであるが、特性は鏡台ではなくてタンスである²⁾」というものであった。これに対して業界は大蔵省への意義申立てを行い、その過程でドレッサーは収蔵部の奥行き 40cm・高さ 60cm・幅 120cm 未満のものと、収蔵部分の大きさが規定されることで鏡台として課税対象から外された³⁾。この基準は高級品においても継承されている。

ドレッサーの登場は、鏡台の洋家具化を決定するものであり、高度成長期の社会の変化を反映している。すなわち、サラリーマン家庭の増加による主婦の大衆化である。

嫁入り道具のイメージ戦略

昭和 30 年代頃から徳島鏡台は、高級品路線を目指す。(株) 丸二(徳島市大和町)は、第 6 回全日本優良家具展(昭和 38 年)にて林野庁長官賞を受賞するなど、製品開発に力を入れていた。昭和 35 年頃からフランスのガラス製造会社サン・ゴバン(Saint-Gobain, 1665-)社製の特殊ガラスを用いた新製品の開発を手がける。開発担当者の笹田専務は、海外の書籍でヨーロッパ家具の現状を調べたのち、フランス製舶来鏡のイメージに合わせて真っ白な「白鳥セット」を打ち出す。この家具シリーズは総桐製であり、しかしデザインは、曲線を持つロココ調の仕上がりであった。白のポ

リエステル塗料を塗るために、桐の本体にシナ合板を表面材として貼りつけたとされている⁴⁾。この白鳥セットが人気商品となるきっかけとなった週刊誌には、「純白の家具をもってお嫁に行きたい」という記事が掲載されており⁵⁾、日本の家具製作技術を用いて、西洋風のより豊かな住まいのイメージを実現しようとした事例だと言えるだろう。

まとめ

戦前の阿波鏡台は、量産化のための製造技術の合理化や商品としての価値向上が主目的であった。しかし高度成長期には、業界の拡大によって他社との差異を目指すオリジナル製品の開発が積極的に行われるようになる。同時に生活の洋風化に合わせて鏡台も日本の家具技術で洋家具を模倣するようになる。鏡台加工業者は自らを開発問屋と称し、製品開発競争は特許開発の競争となる。表面加飾技術の開発は重要な位置にある。特に大衆社会が求めた花嫁のイメージの消費は、ポリエステル塗装の導入によって実現し、家具の表面加飾の可能性を広げた。

註

- 1 2023 年 9 月 8 日実施。阿波鏡台歴史館(江淵鏡台店)〒770-0866 徳島県徳島市末広 1 丁目 1-40
- 2 徳島県鏡台協同組合編『徳島鏡台いまむかし徳島鏡台協組二十五周年史』1977 年, p.373
- 3 同前書, p.378
- 4 同前書, p.460
- 5 『女性自身』, 昭和 41 年 12 月 5 日号